



アシスティブ・テクノロジーを活用した学修支援 / 小瀬 博之	1
2015 NACADA International Conference 報告 / 大枝 さやか	3
第 21 回 FD フォーラム 大学教育を再考する ～イマドキから見えるカタチ～ / 北川 直子・大枝 さやか	7
新任教員紹介 / 伊藤 瑛海	8
FD セミナー報告 合理的配慮が変える大学教育 - 恩恵から権利へ - / 番園 寛也	9

◆ アシスティブ・テクノロジーを活用した学修支援

小瀬 博之

教養学部副部長 (学修支援担当)

我が国は他の先進諸国と比べて障害者支援体制が十分に整備されていないと言われています。そのような中、来月(2016年4月1日)障害者差別解消法が施行されますが、これに伴い私立大学においては障害者への差別的取扱いが禁止され、合理的配慮の努力義務が課せられるようになります。合理的配慮とは他の人との平等性を確保するための適切な変更や調整とされ、具体的な内容はケースバイケースで判断していかなければなりません。個々の障害者のニーズと支援の実現可能性を照らし合わせながら、双方にとってよりよい支援策を見いだすために最大限の努力することが重要になります。そのためには、大学側も多様な支援方法を提示できる体制を整えておくことが求められるようになります。これには新しいテクノロジーを活用する方法もあります。例えば、近年急速に普及したスマートフォンなどのカメラ機能を使えば、書字困難の学生の負担感がかなり改善し、学修の大きな助けになる場合があります。小稿では障害学生の支援における様々な新しいテクノロジーを活用した、有効な支援事例を紹介致します。

【発達障害】

2015年度の本学で支援申請をしている発達障害のある学生は15名で、近年増加傾向が見られます。支援の形態は種々ありますが、共通していることは一度に多くの情報を処理することに困難を覚えているということです。このような学生に対して、授業で用いたパワーポイントファイルを Moodle で提供したり、講義を ビデオ配信 すること

は有効です。更に、パワーポイントのスクリーンキャプチャー機能を用いれば、講義音声のスライドショーに取り込んだファイルを作成することができるので、ビデオ配信より簡便に授業復習の機会を作ることができます。また、授業の内容だけではなく、授業中の種々のアナウンス(宿題・テスト・課題の内容、締切日、教室変更等)などを口頭説明以外の手段で提供することは発達障害系の学生の学修を円滑なものとするために大切なポイントです。支援申請をしていない学生の中にもコミュニケーションに問題が見受けられる学生は多数存在する(一説によると10人に一人程度)現状を考えると、支援学生の有無に関わらず、特に大きなクラスでは Moodle による情報伝達は必須手段と言えるかもしれません。

【聴覚障害】

障害の程度にも寄りますが、FM 補聴システム や 難聴者向けスピーカーの開発が進み、最近支援現場で用いられ始めています。FM 補聴システム はその名の通り FM ラジオのように音声を話者から電波で飛ばし、補聴器や人工内耳を介して補聴するものです。通常のマイクと異なる点は、音がよりクリアになるという点で、特に教室など雑多な音源がある環境での使用が有効です。一方、難聴者向けスピーカー は単に音量を増幅するだけでなく、難聴者にとって特に聞こえづらかった音 (高周波数の子音の音など) も聞きやすく調整されており、音声によるコミュニケーションをサポートするものです。また、音声認識ソフト による

自動テキスト変換も次第に普及しつつありますが、教育現場では変換精度が十分でなかったり、特に本学のように授業で二つの言語が日常的に使われる環境では更に実用が難しいのが現状です。

【肢体不自由】

肢体不自由の学生にとって困難の一つはノートテイク(板書)です。本学においても、PCやタブレット端末を用いたノートテイク、あるいはスマートフォンなどのカメラ機能を使った板書の撮影・講義の録音などで復習に役立っている学生がいます。障害学生でない学生がこのようなデバイスを使用することに賛否両論があると思われませんが、支援申請をしていない学生の中に板書に困難を覚える学生も一定数存在するので、特別学修支援室としましては教員の皆様に臨機応変な対応をお願いしたいと考えております。

ここ数年、入学試験において特別措置を申請する生徒も増加傾向にあります。障害者が障害があることを意識しなくてすむような環境の整備に取り組んでいかなければなりません。本学では既に多くの教員が障害学生支援の経験を持っていますが、各教員が行っている工夫等があれば特別学修支援室までお申し出頂き情報共有を是非ともお願い致します。

◆ 2015 NACADA International Conference 報告

大枝 さやか

アカデミックプランニング・センター

2015年6月23日から26日までNACADA (National Academic Advising Association) の国際大会 (International Conference) に参加する機会を得ました。NACADA は在米のアカデミック・アドヴァイジングの学会および職能団体で通常は米国内でカンファレンスや研修を行っています。アカデミックプランニング・センターは設立当初からNACADA のカンファレンスや研修に継続的に参加し、アドヴァイジングの最新事情に通じるとともに、より高いアドヴァイジングの知識を得るよう努めてきました。近年NACADA は Global Community for Academic Advising を掲げ、グローバル展開に力を入れるようになり、2013年に初めて米国外で国際大会を開催しています。今回私が参加したのは国際大会としては第二回目のもので、オーストラリア・メルボルンで開催されました。

米国で毎年秋に開かれる NACADA Annual Conference は米国内とカナダからの参加者で占められますが、今回の国際大会の大きな特徴は参加者の多様性であったと思います。オーストラリアからの参加が圧倒的に多く、ニュージーランド、中東、東アジアからも来ていました。米国からの参加も相当数ありましたが、カンファレンス会場となったメルボルン大学とロイヤルメルボルン工科大学の教職員が大変目立っていました。全部で300名近い大学関係者が集い、3つの全体会 (Plenary Session) と興味があるものを選んで参加する分科会 (Concurrent Session) において、アカデミック・アドヴァイジングにまつわる様々なテーマが熱く議論されました。

3つの全体会 (Plenary Session) に関して、要旨と私の感想を紹介します。

1. Plenary Session 1 (Dr. Charlie L Nutt)

NACADA の Executive Director である Nutt 氏によると、アカデミック・アドヴァイジングは学生の成長にとって重要な役割を果たし、学生の在籍率 (retention rate) と修了率 (completion rate) の向上に大きな影響を与え、ひいては大学の評価を高めることに繋がるとのことでした。新入生に対するアカデミック・アドヴァイザーの大きな役割

は、新入生にとって全く初めての経験である大学の文化を「通訳」し理解を助けること、そして新しい環境の中で学生が自律的に動けるよう様々なところとの connections をつくるのが挙げられていました。さらに、優秀なアカデミック・アドヴァイザーは学生の学び全体に大きな影響を与えることができます。

アドヴァイジングは単なるサービスではありません。大学教育にあってもなくてもよいような「おまけ」でもありません。アドヴァイジングは大学教育の根幹であり、その重要性が大学全体に認知され、全学を挙げた組織的な取り組みでなくてはならないという言葉が心に残りました。

2. Plenary Session 2 (Dr. George D Kuh)

インディアナ大学ブルーミントン校の Kuh 氏は、米国とカナダで広く活用されている評価ツール National Survey of Student Engagement (NSSE) の開発を率いた人物です。現在の米国では、大学を卒業してから38歳までに10-14の仕事を経験すると言われていています。このような変化の激しい環境で成功を重ねていくことができるよう、大学は学生に幅広い知識や分野横断的な能力・スキル、学んだことを統合する力、社会に対する責任感を身に付けさせることが求められています。

大学において最も重要なのは student engagement であり、student engagement 向上に資するものとして、学生と教職員との密なコンタクトや active learning を促進する環境、素早いフィードバックが挙げられていました。NSSE で証明されていることでもあります。high-impact activities に取り組むことによって学生の意欲が向上し、より多くの時間と労力を学業に費やすようになります。high-impact activities の例を挙げると、1年生セミナー、ラーニング・コミュニティ、ライティングに重点が置かれるコース、サービス・ラーニング、コミュニティ・サービス、海外留学、キャップストーン・コース、インターンシップなどです。クラスの外での学びがあり、教員や学外の人たちとの交流があり、他者との共同作業があり、フィードバックが頻繁に受けられ、学生自らが能動的に取り組む学びのスタイルはときに人生を変える経験となります。

high-impact activities が学生の学修へのコミットメントを高めるという話を聞いて、ICU の私の同僚が NAFSA や米国の交換留学協定校を訪問した際、さまざまな場面で「経験（体験）学習」の重要性が強調されていたと話していたのを思い出しました。教室の外に出て実際に体験することは、学生の意欲を引き出し、より深いレベルでの学びを促進することができるため大変重視されているということがよくわかりました。

3. Plenary Session 3 (Dr. Liz Thomas)

英国 Edge Hill University の Thomas 氏によると、学生が学業を継続し成功する鍵となるのは、自分の大学に所属しているという意識（a strong sense of belonging）とのことです。所属意識は学生同士の関係性、学生同士または教職員との有意義な交流、自分の大学で成功できるのだという自信とアイデンティティーを持つことによって生まれます。興味深いことですが、男子学生は大学が提供するサポートを受けることに消極的な傾向がみられます。状況が相当悪化するまで「まだ大丈夫」と思いがちであったり、大学のサポート機関を「最後の手段」と捉えていたり、自分から支援を求めるといった発想そのものが弱かったりします。

教職員との関係を安定的に保ち、普段から何でも相談できる教職員がいる学生は、大学への所属意識が高く、常に正しい情報を得て物事に適切に対処しながら学業に打ち込むことができます。アカデミック・アドバイザーやピア・メンターが anchor（いかり、頼みの綱）の役割を果たし、学生を大学にしっかりとつなぎとめておくことができれば、学生はドロップアウトすることなく学業を継続する可能性が高まります。

このような態勢を学内につくるにはどうすればよいのでしょうか。どの大学でも教職員は既に抱えている業務で一杯の状態です。新たな責任を引き受けることに及び腰であることは容易に想像できます。この状況では大学上層部のコミットメントが非常に重要です。つまり、上層部の本気のコミットメントがあつてこそ教職員は自分の大学に対する所属意識を強く持ち、大学横断的にチームワークを発揮することが可能になるとのことでした。

アカデミック・アドバイザーやピア・メンターが anchor（いかり、頼みの綱）となるという話を聞いて、私は自身の所属するアカデミックプランニング・センターや IBS（ICU Brothers and Sisters）が anchor の一つとして機能できればよいと感じました。ICU では退学率はさほど問題になってはいませんが、どんな学生でも一時的に成績

不良に陥ったり、さまざまな理由から困難に直面することはあり得ます。そういったときに頼れる存在となり、学生をしっかりとつなぎとめておくことができると思います。アカデミック・アドバイザーやカウンセリング・センター、学修・教育センター（CTL：Center for Teaching and Learning）が anchor になることもあるでしょう。

教職員は現在の自分の仕事に手一杯で、新たな仕事を引き受けることには消極的であるという話には、国が違っても状況は似たようなものなのだとなるほどと思いました。大学横断的なチームワークを発揮するには上層部のコミットメントが不可欠というのは、アドヴァイジングは全学を挙げた組織的な取り組みでなければならないという Dr. Charlie Nutt の言葉と呼応するものがあると感じました。

以上が 3 つの全体会（Plenary Session）の要旨と私の感想です。

分科会（Concurrent Session）のテーマは、アドヴァイジングの理論や手法に関するもの、ピア・ラーニング、優秀層の学生やマイノリティ学生へのアドヴァイジング、国際学生へのアドヴァイジング、キャリアに関するものなど多岐に渡っていました。ここでは emotional intelligence とキャリアに関連するテーマ（エンプロイヤビリティ・スキル）の 2 つを取り上げて紹介します。

1. Book Smarts are Never Enough: Emotional Intelligence and Academic Success

Amy Sannes 氏、Deb Seaburg 氏 from Minnesota State University Moorhead

高校までは優秀だった学生が、大学の環境に馴染めなかったり、途中で目標を見失ったり、プレッシャーやストレスに押しつぶされてしまったり、さまざまな理由で挫折するケースがあります。学力だけではない何かがとても重要なのですが、それが emotional intelligence です。emotional intelligence は以下のように説明されています。

- Accurately know yourself in terms of personal strengths and weaknesses
- Establish and maintain effective and healthy relationships
- Get along and work productively with others
- Deal effectively and healthily with the demands and pressures of daily living

(Nelson & Low, 2003)

アドヴァイザーは学生の emotional intelligence を育てるような関わり方が求められます。emotional intelligence に深く関わる 3 つのスキル—① Drive strength (自分にとって意義ある目標を設定し、自らを動機付けてエネルギーを集中し、その目標を達成する)、② Time management (課題を管理し、自分のスケジュールに合わせて時間を有効に使い、課題を達成する)、③ Commitment ethic (コミットしたことを着実に完了する)—を育てるには、アドヴァイザーは学生にどのようなポイントで働きかけるとよいのかを知ることができました。また効果的な質問やディスカッションについても言及がありました。

私の普段のアドヴァイジングの中でも、学生の目標設定を手助けすることがあります。目標を達成するためにどのようなステップを踏めばよいのか、時間とエネルギーをどのように確保するのかなど、学生と話し合うことがあるので、emotional intelligence の考え方と効果的な質問を知ることができたのは有意義でした。emotional intelligence は社会人にも有益な能力・スキルといえますので、「アドヴァイザー自身も自分の emotional intelligence を理解し、生涯をかけて育てていく必要がある」との言葉に心から納得しました。

2. Integrating Employability Skills in Curriculum Design and Tertiary Teaching: The Role of Academic Skills Advisors

Paula Keogh 氏, Barbara Morgan 氏 from Royal Melbourne Institute of Technology

日本でもよく耳にするようになった「エンプロイヤビリティ・スキル」は、アカデミック・スキルを仕事の環境にあてはめたものと言えます。エンプロイヤビリティ・スキルの中でも特にコミュニケーション・スキルは、カリキュラムの中で明確に意識される必要があるという主張が本セッションを貫いていました。

最初にエンプロイヤビリティとは何かという問いかけがプレゼンターからあり、参加者から—① Professional communication skills, ② Emotional intelligence, ③ Discipline, ④ Knowledge and application, ⑤ Career development learning—が挙げられました。次にプレゼンターより Professional communication skills を細かく分解すると—① Oral and visual communication, ② Reading and writing in a wide range of genres, ③ Critical and creative thinking, ④ Negotiation, ⑤ Networking, ⑥ Working in groups, ⑦ Problem solving, ⑧ Research and referencing—があるという説明がありました。

これを見ていて、日本の社会人基礎力に似てい

るという印象を受けました。国や文化が違っても仕事で必要とされる能力・スキルは似ていることが興味深かったのですが、少し違いがあるとすれば emotional intelligence に関することです。emotional intelligence は前述したようにきわめて広範なスキルで、中でも time management が比較的大きな部分を占めるようですが(学生は time management を身に付ける必要があるという話があるいろいろな場面に出ていました)、日本では時間管理や効率の重要性はそこまで強調されていないように思えます。さらに、Career development learning は変化が激しく流動性が高い社会では必須であるといえます。日本も今や例外ではなく生涯学び続ける必要性が言われていますが、少なくとも社会人基礎力の 3 つの能力および 12 の能力要素には含まれてはいないことは興味深いと言わざるを得ません。

最後に、Professional communication skills を身に付けるのに有益な科目は何かというテーマで小グループに分かれて話し合いました。グループワークを伴うコースやキャップストーン・コース、インターンシップ、理系のラボなどが挙げりましたが、Plenary Session 2 の Dr. Kuh が話していた high-impact activities に当たるものはすべて Professional communication skills の向上に役立つと気付かされました。

まとめ:

NACADA のカンファレンスの特徴は、参加者の大多数が現役のアカデミック・アドヴァイザーもしくはそれに関連した仕事に就いていて、セッションの多くが実践例の紹介を伴うことです。プレゼンターと参加者の距離が近く双方向のコミュニケーションが可能で、参加者同士のコミュニケーションも活発です。共感し合ったり、新たなアイデアを交換したり、非常に有意義な時間を過ごすことができます。遠く離れてはいても、似たような悩みを持ちながら日々努力している仲間がいることを実感し励まされます。日本ではアカデミック・アドヴァイジングが一般的ではないので、日本の大学関係者と話しても同じレベルで知識やノウハウを交換することは難しいのが現実です。今回の国際大会に参加したことによって、アカデミックプランニング・センターの基本的な姿勢は本質を押さえたものであり、取り組みは正しい方向にあると改めて確認できたことは大きな収穫でした。

今回のメルボルンでの国際大会で特筆すべきことは、中東からの参加者が多くみられたことです(この次の国際大会は早くも 2016 年 2 月にアラ

ブ首長国連邦ドバイで開催されました)。一方、日本からの参加は私以外には 2 名 (それぞれ創価大学と立命館大学) のみでした。アカデミック・アドヴァイジングは広範なテーマを包含するものですので、アドヴァイジングは日本でも十分有効だと私は考えています。毎年 NACADA に参加し最新の情報や手法について見聞を広め、より高いアドヴァイジングの知識を得ている日本で唯一の大学として、これからも地道により良いアドヴァイジングを追求し広めて行きたいという思いを新たにしました。

❖ 第21回FDフォーラム 大学教育を再考する ～イマドキから見えるカタチ～

大枝 さやか アカデミックプランニング・センター
北川直子 学修・教育センター

3月5日、6日に京都外国語大学で開かれたFDフォーラムに参加しました。今回のフォーラムは、初日のシンポジウム、2日目の分科会と二部構成になっていました。

1日目のシンポジウム「大学教育を再考する ～イマドキから見えるカタチ～」は京都大学高等教育研究開発推進センター 山田剛史氏の司会により始まり、「学生論」「教育論・学問論」「組織論・職員論」について、国公立、管理職・教員・職員、大学内外と立場の異なる4者の報告を交え、参加者全員で考え、共有しました。

(1) イマドキと今後のメガトレンドを踏まえた大学教育のカタチを教育NPO視点で考える

NPO 法人 NEWVERY 理事長の山本繁さんがお話されました。大学教育のトレンドと今後の取り組みとして、WEEKDAY CAMPUS VISIT や教育寮の運営などを挙げられました。

(2) 「社会の教育力」を大学へー学びと働きをつなげるー

京都府立大学地域連携センター副センター長の杉岡秀紀さんが近年の新書等から見る「大学教育」の課題をお話した後、「学び」と「働き」をつなげる取組みとして、京都中小企業家同友会との連携や具体的なインターンシップを紹介されました。

(3) イマドキの大学経営の視点と教育改革

追手門学院大学学長補佐の池田輝政さんが「顧客視点」「学士力」を切り口に、経営は何を目指すのかについてご自身の経験からお話くださいました。

(4) 職員の成長・育成課題と大学教育

立命館大学国際部事務部長の大島英穂さんが今日の就業環境や大学組織の状況を踏まえ、今後の職員に求められるものや職場での学びについて発表くださいました。

この後はシンポジスト討論やフロアディスカッションなど行い、会場が大いに盛り上がりました。

2日目は分科会が行われ、アカデミックプランニング・センターの大枝は『授業の場における「ことば」の交換～対話的コミュニケーションと学生の主体性～』に、学修・教育センターの北川は『大学改革とFD～批判と提言～』に参加しました。

『授業の場における「ことば」の交換～対話的コミュニケーションと学生の主体性～』では、主体的な学びにはことばの交換を基本とした対話的交流が重要であるという考えが貫かれていました。対話にはいくつかの組み合わせがありますが①それぞれの学生の内で行われる自身との対話、②学生同士の対話、③学生と教職員との対話—こうした対話的交流を意識的に工夫し授業を展開している先進事例に触れることができました。

人が何かを学ぶには、異なる他者との対話が必要なのだそうです。新しい知識や事象に出会った際、葛藤したり躊躇したりするポイントは人によって違います。この差から学ぶところが大きいというお話を聞いて、学生や教職員の多様性の豊かさが鍵であることと対話がいかに大切であるかを理解しました。

本分科会では、対話的交流に重きを置いた授業を実際に参加者が体験するワークショップもあり、そのひとつは4人1グループで連詩を完成させるというものでした。この授業の狙いは、いろいろな人と考えや言葉を共有することによって自らの思索が深められること、さらには社会的な言葉が獲得されることでした。協同で詩をつくるプロセスによってこれらを育もうというのが非常に興味深かったです。

私が普段取り組んでいるアカデミックアドヴァイジングも対話を基盤に展開されます。「対話」というキーワードに引かれて選んだ分科会でしたが、学生の主体性を促す対話とは何か、学びとは何なのかを改めて考える良い機会となりました。

(大枝)

『大学改革とFD～批判と提言～』では報告者（3名）、指定討論者（1名）、コーディネーター（1名）が中心となり、3名の報告者の報告後、指定討論者を交えた討論、そしてフロアディスカッションが行われました。5名中3名が哲学分野の教員ということもあり、「FDの原点にあるべき問い」や「役に立つとはどういうことか」という根源的な問いがなされたことが印象的でした。

例えば、「実践的な社会人基礎養育力」という言葉はよく聞きますが、「実践的」とはどういうことなのか？最近では「アクティブ・ラーニン

グ」「インターンシップ」が流行っていますが、それとは別に、いわゆる「古典」を学ぶことも重要ではないかという意見が出ました。

私自身、一年間FD担当職員として悩むことも多く、何かヒントがもらえればと参加したのですが、多少の違いはあれ、どの大学もどの教員も似たような問題で悩み、答えを見つけようとしていることが痛感されました。ある教員の「FDとは何か？すぐには答えの出ない居心地の悪い・落ち着きのない状況と長期的に粘り強くつきあっていくことが求められる」という発言が強く心に残り、今後の業務において心がけなければと感じました。（北川）

◆ FD セミナー報告

合理的配慮が変える大学教育 – 恩恵から権利へ –

講師： 星加良司氏（東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター専任講師）
飯野由里子氏（東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター特任研究員）

日時： 2016年1月26日(火)14:00-15:00

会場： ダイアログハウス 2F 国際会議室

2016年4月に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（通称：障害者差別解消法）が施行されます。この法律では、障害のある人が、障害のない人と平等に人権を行使し、享有するための仕組みとしての「合理的配慮」の概念が日本で初めて導入されることとなります。障害のある人に対して提供される合理的配慮は、障害の種別や重さなどで一義的に決定されるわけではなく、個別の状況やニーズに応じて様々な形を取るものです。そのため、大学として合理的配慮を提供していくためには、個々の事例だけではなく、その根底にある考え方を理解することが重要です。

今回のFDセミナーでは東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターから星加良司先生と飯野由里子先生をお招きし、「合理的配慮が変える大学教育—恩恵から権利へ」と題し、障害者差別解消法と合理的配慮が高等教育にもたらすインパクトと課題についてお話いただきました。

セミナーの前半では、飯野先生から、障害者差別解消法の条文に即しながら、その意味するところや実際に大学の現場でどのような対応が必要となるのかについて解説していただきました。そのなかで飯野先生が特に強調されていたのは、合理的配慮を提供する側と受ける側の間のコミュニケーションの重要性です。合理的配慮が適切に提供されるためには、学生のニーズや状況を十分に考慮し、それらを教育の目的、そして実現可能性などと照らし合わせながら具体的な内容を決めていく必要があります。そのためには相互の信頼に基づいたコミュニケーションが欠かせないということでした。

後半では、星加先生から、合理的配慮の考え方が大学教育に導入された際に懸念される課題についてのお話がありました。課題の一つとしては、コストの論理によって、学生にとって最適な配慮



ではなく最低限のアクセス保障に限定されてしまう可能性が指摘されました。また、大学教育の効果として測られるべき「本質的な能力」は自明ではなく、その曖昧さが保守的に機能することによって、学生の能力評価の場面で合理的配慮が適切に提供されない可能性についても言及されました。セミナーの最後になされた、合理的配慮をめぐる大学と学生間のコミュニケーションのプロセスは、大学にとっては自らの教育の本質がどこにあるのかを問い直し、多様であり得る教育の可能性を改めて認識する重要な機会でもあり、また学生にとってはそれ自身が教育的な機能を持つという指摘は、非常に示唆に富むものでした。

現在、対応要領の策定など合理的配慮が全学的に提供できる体制づくりを進めています。そうした準備作業を進めていくうえでも基本的な考え方を再度確認できた有意義な時間となりました。

番園 寛也
学修・教育センター

※当日の動画記録を ICU tv 内の下記 URL より視聴できます。
※視聴には ICU Net ID が必要です。
<https://sites.google.com/a/icu.ac.jp/icutv/fd-seminar/fdseminar-20160126>

Published by Center for Teaching and Learning
International Christian University

ILC-212 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan
Phone: (0422)33-3365 Email: ctl@icu.ac.jp
